

---

# お人形になっちゃった！

宇ノ鹿 すい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お人形になっちゃった！

### 【Nコード】

N5657Q

### 【作者名】

宇ノ鹿 すい

### 【あらすじ】

うつうつうつうつ。うつ。

「強みが足りないんだよ。君は片方にばかり気をやっているというわけ。バランスが悪い。つまり深みがないってことじゃん！ そんな君にLET'Sプレゼント！」

その言葉と共に渡されたのは、ダンボールの小包だった。配達などで本を配送する時に梱包に使われるような大きさのダンボールだ。「何が入ってるんですか？」

と僕は尋ねただけで、その人は首を横に振るだけで僕に答えを促すのみだ。

「うーん」と深く考え込む態を作った僕を、その人はちらちらと見ながら、やがて何か用事を思い出したのだろうか、

「ちよつと出掛けてくる。その梱包、開けちゃだめだよ！ シュデインガーの猫つてわけじゃないけど、開けたら楽しみがなくなってしまうからね！」

釘を差してから部屋を飛び出していったその人を、僕は別にただ単に突っ立ったままに見送った。「じゃあね」とも「ばいばい」とも言わない。社会的に無礼だったかもしれないけれど、そんなことが問題なのではないってことは今更語るまでもない。だが、まあ、言っても言わなくても同じ「ばいばい」だってあるのだから、言わない「ばいばい」があっただっておかしくはないだろ。社会的に違和感があるだけで。

それと同じことで、僕の作品には深みが詰まっているのだけれど社会的には何も詰まっていないように見えるっただけなのさ。そう、世の中には一億通り以上の物の見方があるじゃないか！

「ちよつとあんさん。ちよつとあんさん。それは無理矢理でつすがな」

「んん！？ なんだ突然。誰だ！ 姿を現さないと、逆さにしちゃうぞ！」

と脅しつけると、「ひい」と呻きながら、床から、一匹のポップコーンが現れた。

「オレがここに隠れていると知っているとは、あんさん、なかなかやりまっせな」

僕はポップコーン怪人が現れたことを理由にしてこのシュレディンガーの猫梱包を開いていい理由を造り出すことは出来ないかなあと思ったが、頭が回転しないから、答えは出せなかった。デスノートの主人公並に頭がよければなあ！と思いながら、ポップコーン怪人のポップコーンを貪り食った。うすしお味。

「あんさんあんさん。食べないでくだせえ。このポップコーンはあなたのためにあるのじゃございませぬ」

「じゃあ、誰のためにあるのだ。いってみよ」

「あつしの友人のためでござんす」

「ほう。それは何処の誰だ。何処出身でどこに存在していて何分何秒後に死ぬ人間なのだ。それを正確に答えなければポップコーンを食べるこの右手のうねりを止めることは我が脳味噌の誇りにかけて不可能だ。わかったなら、おとなしく黙ってそこに正座してオレの右手によってポップコーンを貪られる。それがわからないならば、今すぐ貴様はこの部屋から退出するのだ」

「わ、わかりましたあ」

「それでいいんだよ。ふふふ」

しかし調子に乗った僕に彼が密かな殺意を抱いたことは否めない。ポップコーン怪人は早めに始末する必要がある。そんな密かな思いを抱えているのにも疲れたので、僕はあの人が帰ってくる前にこの梱包を開けるべきか、それは否か、ということについて考えている。

その内に思いついたのは梱包入れ替え作戦だった。僕はパソコンを起動し、密林というサイトにアクセスすると本をお急ぎ便で注文した。ふふふ、と僕は不適に微笑んだ。あの人が帰ってくるのは、二日後だ。

「あ、どうも」

「ありがとうございます」

なんて対応の後に僕は扉を閉めた。そして、よっしゃとガッツポーズを決めようとも思ったがそれは止めておいて、ポップコーンの食いすぎでべたべたな右手を水道で洗浄してから、ポップコーン怪人の遺体も洗浄した。その後に、部屋の中でふと思い出したのは過去だった。

あの人と会った前の僕と、あの人と出会った後の僕。それに変化はあるだろうかと思った。

そしてそのことは、どんな人間との、或いはどんな対象との、出会いで置き換えられることだった。

人は人同士で影響を与え続ける。物と人でもそうだ。物と物でも、磁石などは引き付けあったり弾きあったりする。おはじきだってそうだ。風と大地だってそうだ。水と岩だってそうだ。空と陸だってそうだ。海と魚だってそうだ。僕達は関係というのは何時だって持ち合わせている。因果関係とそれを人はいうのか。

そんな小難しい単語を並べると揚げ足取りにひっかかってしまうので、あまり小難しい単語は使わないほうがいいな、と思いつつ僕は梱包を二つ、持ち上げて、ひひひ、と呻きながらシュレディンガーの猫を解放してやった。開封と開放と解放。それによって解放的な気分。ダンボールと人の関係さ。

梱包を開いた瞬間に、閃光が視界の前で広がった。

僕は、「あつ」と叫んだ。

部屋の前に立って鍵穴に鍵をさした時に、臭いが中から漂っていることに気が付いた。オレは疲れていた体が途端に焦りに満ちるのを感じる。

「あー。馬鹿だな！」

額に手の平を打ち付けてから、玄関に入り、廊下を進み、扉を開いて部屋に入ると、そこには彼がいるのだが、その彼の目前では梱包が開かれている。中身は無い。中身は、彼自身になってしまった。「ち、ち、ちくしょう。なんで僕が人形にならずにちゃんならないんだ……」

「馬鹿だなあ。人と物が対峙するときには心を許してはならないんだ。人の形を模した人形という存在は、自らが人間に成れないことを悲しみ、魂を無理矢理に位置交換してしまうことがあるんだ。お前が梱包を開かなければお前が人形になることはなかったし、人形がお前になることはなかったんだよ」

「そ、そんな。僕は、一生人形のままなのかい」

「人形が人間の身体に飽きない限りはお前はそのままだ。人形もといお前の身体は、出て行ってしまったのか？」

「そ、それが、人形は社会的常識をわかっていないらしく……。ドアから出て行くのかと思ったら……」

「……………まさか！」

オレはさすがに肝を冷やした。ソノ先の解答を得るのは遠慮したかったが、もう答えはわかったようなものだった。俺は立ち上がり、窓に駆け寄り、ベランダに出ると、階下を見下ろす。そこでは警察がいろいろとやった形跡があつて、彼の身体が落ちたせいだろう血の跡があつた。

「う…わ…あ……………」

呆然とした気持ちになりながら部屋に戻ると、人形になってしまった彼がさめざめと泣いている。涙が零れ落ちることはなく、声だけが部屋にむなしく響いているという有様だ。

オレはそれなりに彼を慰めようかと思ひ、

「人形でもきつと、楽しいこともあるって。何事も、捉え方しだいだ」

と誰でも思いつくようなことを言っているなあと思いつつもそんなもんだとも感じるのだった。

彼は、怒った調子になる。

「楽しいことなんかあるか。悲しいことだけだよもう僕の世界は！作品を作ることともこの姿では出来ないし、思索だって人間視点では出来ないんだ！うう、むなしいぜ」

「人形視点の作品を作ることができるじゃないか。オリジナルティに溢れてるね。でも、こういう風に人形になっちゃった人間ってのは他にも何人もいるけどな。…あ、でも、みんな故意に人形になるわけだけど、お前は誤って人形になってしまったわけだ。その深い悲しみを、憎しみを、作品に投影すればいいだろう！」

と、言ってからオレはふと思う。

ま、なるようにしかならないな、と。

「僕が人形になる前に人間には幾通りも物の視点を変えることが出来るという思索をしていたんだ。それが僕の身体を奪った人形に影響して、彼は窓から飛び降りてしまったんじゃないだろうか。……ああ、後悔極まりなし。やっぱり、社会的な視点を忘れている物の見方は使い物にならねえ！」

なんか彼が興奮しているので、オレは慰めるのも面倒になってきたので、また出掛けようかなと思った。それで外に出ていこうとすると、

「ま、まてよ！」

と人形の彼が呼び止めながらひよこひよこ歩いてくる。その様子を見ながらふとオレは悟る。

「お化け屋敷にアルバイトにいつてみるってのもありじゃねえんかな？」

というわけで、僕はあの人の薦めに従いお化け屋敷でアルバイトしてみようかと思ったが、人形の姿をした人間がひよこひよこ歩いてるさまを気が付かない人間どもは、僕を容赦なく踏みにじっていく。屈辱だった。はつきりいつて、屈辱まみれで汗まみれだ。だけどもあ、それでも何とか面接の場所に辿りつき面接してみたのだが、

「履歴書は」と聞かれた時に血が昇ってしまつて、  
「あるわけねえだろぼけかすが！　僕は人形になつちまつたつていつてんのがわかんねえのか！」

しかし面接のメタボ中年男性は、

「まあ、目は悪くないんでそれはわかります」

と言つた後に、何か上手いことをいつたと思つたのだろうか、

「ふふふ」と薄笑いした。そんなのは普段なら別になんともないのだが、僕はこの時既に人形だつたわけだから余裕が無い。というわけで怒りはさらに噴火して溶岩が飛び出る心持ちだつた。勿論、溶岩が出せるのは火山だけだ。火山がうらやましい。

「もう、いいです」

疲れ果てたのでお化け屋敷でアルバイトをするのは諦めた。

「ぼ、ぼ、ぼ、ぼつぶこーん怪人がなぜここに！　たしかに洗浄したはずだ！」

「ククク。地獄の底から甦つたのさ。貴様に復讐を果たすためにな

！」

「な、なんだつてえ」

「覚悟しろ！」

ポップコーン怪人うすしお味にポップコーン乱舞をかまされて人形の僕はろくな抵抗もしないままに路傍の石と成り果てた。そして、みじめな自分の人形の身体を見た時に思った。

「そうだ、僕はもともと路傍の石だつたんじゃないだろうか」

と気が付いた。ポップコーン怪人は、

「あたりめえだろ！」と怒りをつよめながら、僕に空手チョップをした。

「ぶぎゃああああああああああああああああああ」

激痛に悶えながら、僕は入院した。なんだかよくわからないところで、全治一日だった。

その経験を元に作品を作り上げた。

題名は、「路傍の人」だ。しかしそれをプロに送りつけた所、「くそつまんねえ」と言われて一蹴だった。泣き腫らしながら僕は部屋に帰る。すると、あの人が呑気にパソコンをいじくっている。

「ふざけんじゃねえぞ！ おつかしくねえ！？」

と叫ぶと、彼はこちらに振り向き、「何をいつてるんだ。一度や二度で上手くいくと思うなよ」

と眉根をひそめながら言うのだった。ごもつともだと感じたので「そうですね」

と、人形らしく棚の上にも収まっていることにした。

五十回目の挑戦で、僕は道を開いた。プロになった。だけどあの人は言う。

「道はソノ先もずっと続いている。道は死ぬまで終わらない。たしかにこれから先お前の状況は変わっていく。だけど確かなことが一つだけあってな。それは、道は続けば続くほど、彩り鮮やかな虹に変わるってことだぜ。人はそれを奇跡と呼ぶんだぜ」

「ふうん」

偉そうにいいやがって。オレだってそんなくらいわかってるつもり

だぜ、という感情を沸き立たせることが出来るのは自分が人形だからだろうか。或いは、人間の時のままでもこんなことを感じていただろうか。これから先、どんな道は長く続き、そして彩りも鮮やかな虹を自分が描いていくことを死ぬまで続けていくのが人生なのだとしたら、今のオレはどんな感じなのだろう。たしかなことは、人と人形の関係があるのと同様、人と人との関係も延々に続くが、それほどに彩りを与えてくれるものは無いということなのだろう。人と人が対話することそれ自体が新たな状況を生み出し、新たなステップを呼び起こす。僕が行っている行為というのは、そういう、とても贅沢な行為なのかもしれない。

そう考えながら外に再び出ると、僕と同じように人形になってしまったという人々に出会うこともあったし、僕が人間だった時の僕しか知らない友人に出会うこともあった。友人は言う。

「なんか変わったね！」

「あたりまえだろわけかす。こんな姿形をしていてお前、変わったなんていう平常な対応するなんてすごいぞ！」

「うるさいね、なんか」

「だけどころやってうるさく喚いたりすることによって新たな道が形成されていくって、僕が人形になる直前から関わっているあの人は言っていたぜ。まあ、もちろん僕もそんなことはわかっていたし、そのことについての考えも多様なものの見方を利用すれば面白い形に変わっていくとも思っていたんだ。そうやって面白いことを続けていくことで人生は面白くなるってことを僕はきつとこれから深めていくことが出来るに違いないのさ」

友人はぼりぼりと頬を掻いてから、  
「だけどそれは幸運だよな。うらやましいよ。そういう風に思えるのがさ」

と述べてから、立ち去ろうとした。呼び止めてみる。

「待ってくれ」

「またあおうねー」

だが友人は立ち去っていった。その颯爽と歩く後ろ姿は人形視点の僕からすればとても大きくて、立ち向かえるものじゃないような錯覚を覚えたものだった。違う線路を歩いているような気がした。僕と友人は違う線路を歩いているのだろうか、と。

「ああ、空が大きいなあ」

青空も大きい。世界の広さ、物事の複雑なる巨大さ、そのものを表しているような青空を形が全然違う雲が横切っていく。

僕は思う。

「こんな経験一つでさえも虹を形成する一つの要因になっているのだろうか」

通りすぎる誰もその答えは持っていないように感じた。誰もがなんとなくの返事を答えるだけのようない気がした。それほどに難しい問題で、しかし楽しい問題だと感じた。

何時までも雲を掴もう、と思った。何時までも道を突き進んでいければな、と思った。

人形の姿でジャンプしてみる。

青空は近づかなかったが、心は安らか、だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5657q/>

---

お人形になっちゃった！

2011年11月12日21時52分発行